学習のページ

故郷の歴史を知る〝理兵衛堤防今昔〟

～天竜川に息づく先人の足跡～

豪雨で出現した理兵衛堤防

理兵衛堤防は、江戸時代の天竜川での治水技術を知る貴重な村の文化財です。しかし明治以後の度重なる洪水によって遺構の大半は埋まってしまいました。

昭和58年、10号台風により堤防の一部が現れ、さらにまた、今年7月の豪雨によりその上流部の石積みが出現しました。

そこで、今回は表紙部分で写真紹介しました理兵衛堤防の概要についてお話します。

松村理兵衛忠欣の肖像画

洪水との戦い

江戸時代の天竜川では、数年おきに大小の洪水がおき、沿岸の人々に大きな被害を与え、恐れられてきました。人々は、そうした災害にもめげず、田畑を起こし返し、橋を架け直し、堤防を修復して、力強く生き抜いてきました。

特に堤防の普請（工事）は大変なことで多額の費用と手間や時間がかかりました。村々では幕府や藩などに援助をお願いしてきましたが、農民自身が自力で工事を行うこともありました。理兵衛堤防は、まさに農民自身が主体的に行った大規模な築堤工事の代表的なものといえます。

築堤に生涯をかけた理兵衛三代

天竜川に前沢川が合流する地域は「田島田んぼ」と呼ばれる米どころでした。ところがひとたび川が氾濫すると見渡す限り田や畑は砂に埋まり大石や大木が散乱する無残な光景と化しました。

こうした光景を目のあたりにしてきた前沢村の大地主松村理兵衛忠欣（ただよし）は、寛延3年（1750）一千石の耕地を守るため幕府の許可を得て自力で本格的な築堤工事に取り掛かりました。その後堤防は、洪水により何度も流されましたが常邑（つねむら）の代を経て文化5年（1808）忠良（ただよし）の代に一応の完成をみました。

忠欣の代から数えて実に60年、後半には幕府の援助を取り付けましたが、家勢は傾き、借金をしてまでして成し遂げた大事業でした。後に人々は忠欣・常邑・忠良の3人に対して崇敬の念を持って「理兵衛三代」と呼ぶようになりました。

豪雨前の理兵衛堤防の様子
橋の下奥の堤防部分が流失して理兵衛堤防が出現した

驚くほどの大規模な工事

堤防工事は大変大掛かりなもので、尾張（愛知県）から石工を招き、その指導のもとで行われました。その工法は松の生木を筏に組み水の底に沈め敷き木としそこへ大石を沈めて基礎とし、さらにその上に大石を積み重ねた堅牢なものでした。長さ180メートルに及ぶ堤防の工事には、延べ50万人余の人が従事したといわれ、また3万両を超える費用がかかったともいわれています。

いま、天の中川橋のたもとの北側に忽然と現れた当時の堅固で大掛かりな遺構を見るにつけ、先人の知恵と苦労と、また生きるための力強さを感じずにはいられません。

※理兵衛堤防については、中川村誌中巻（330頁）に記されていますのでご一読ください。

理兵衛堤防　明治40年撮影